圓光大師傳

十七十八

法然上人行狀畫圖第十七

安居院の法印聖覺は入道少納言通憲の孫子法印大僧都澄憲の真弟なり。叡山竹林房の法印靜嚴を師とし法論說二道をかよて智辯人よすぐれたりき。

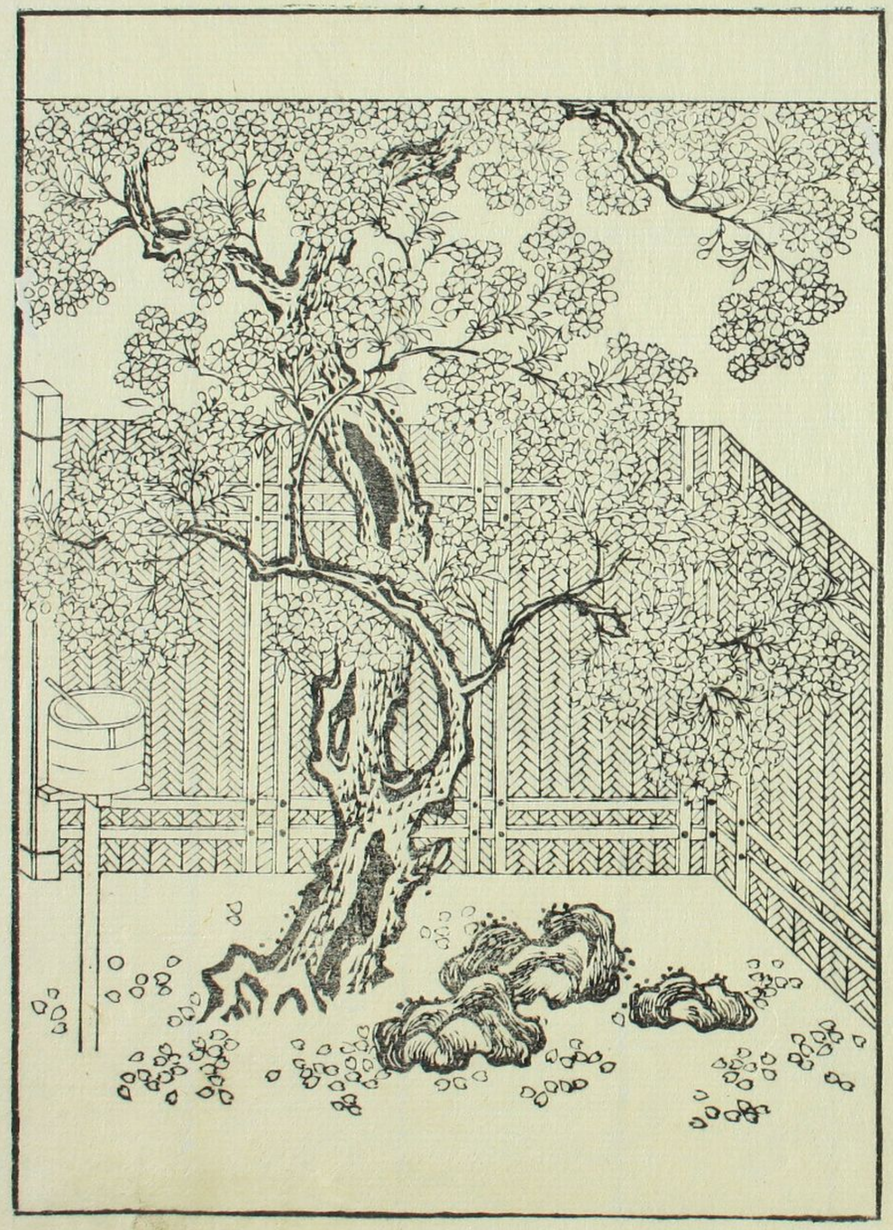
ときよりよ宿習のいとやあわれきんぬく上人の化導に歸して淨土往生の口傳をうけ大和前司親盛入道御往生の後に髮をそりて人よう變をへきと。

上人よりひとてまつりもるして聖覺法印の心地

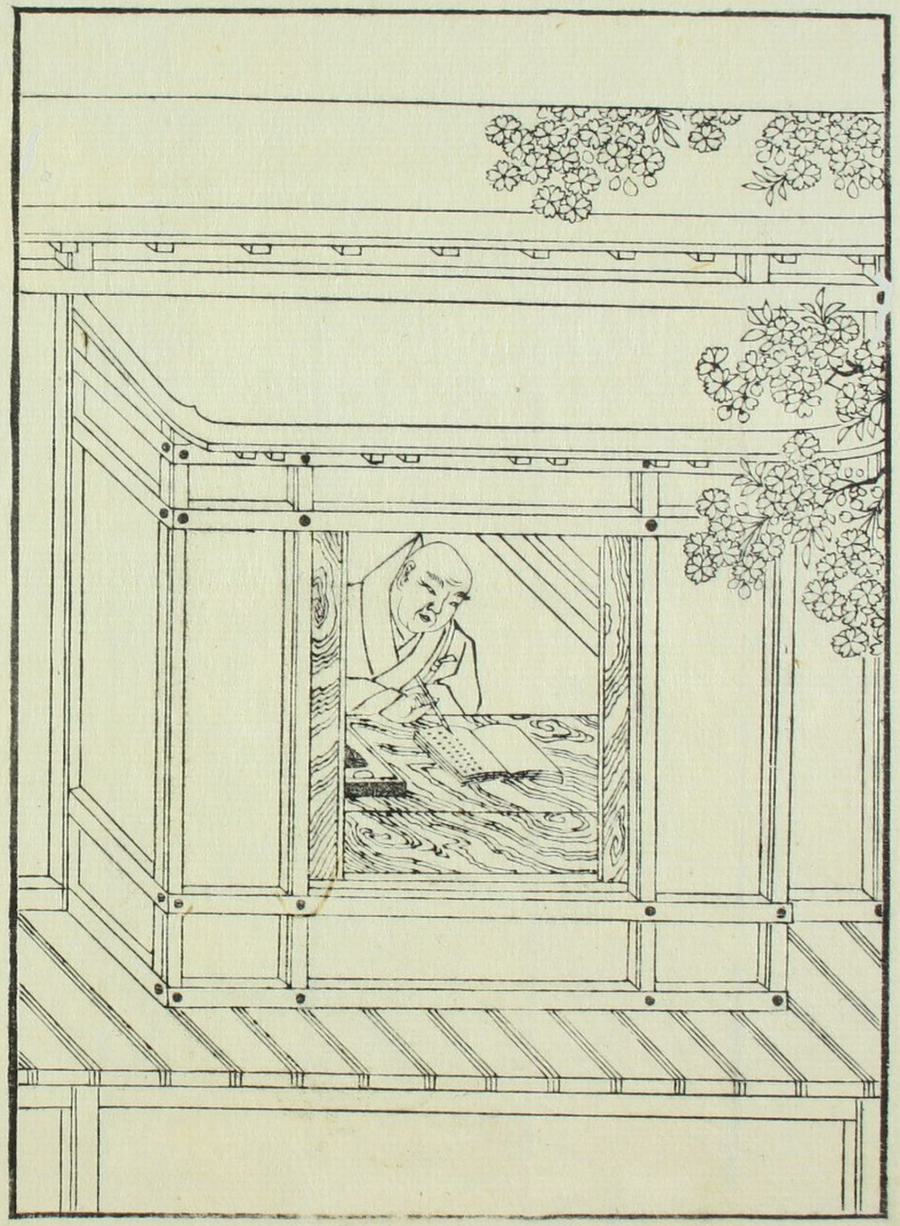
九曜文庫

ましますなり。浄土の法門をもて所存を
のこらず書きさるべきものなり。これいはゆる法然一巻
の書を製作まして、ひろく念佛をすゝむ。世間に流
布して唯信鈔と号するこれなり。この書に云罪
ぬぐはいよ〳〵極樂を願ふべし。不簡破戒罪
根深といへり。善すくなくまします。ひとすらに弥陀を念ぜ
ば、三念五念佛来迎といへり。むなしく身を卑
下して心を怯弱にして、佛智不思議智を疑事なかれ。
たとへば人たゝき岸にあがるにあたりてのがるる事あ
たはざるがごとし。たゞ人岸の上にをりて、綱を
おろしてこれ綱にすがりてこの岸の上にひ
登せんといふがごとし。綱の
よはくして人のちからなくば、綱の
こはれもやぶれて手をおよぼすこと
なかれ。更に岸の上にのぼるべからず。偏にそれ
言ひ出すべきにあらず。掌をのべてこれをうけんよりは即
のがるる事なかるべし。佛力をたのまず願力をたのま

げる人は菩提の岸よりのかなたに只信心乃手をのべて誓願の綱をたぐるへし。電光朝露の命芭蕉泡沫の身わづかに一世の勤修をもて忽に五趣乃古郷をさらんこと豈ゆく諸行を兼んや。諸佛菩薩の結縁に随心供佛の朝戒朝を廢て大小経典の義理に百法明門乃暮を待へし。已上略抄と宜待ぬこの法門ぬく上人の勸化を信敬のあひだ處こゝにして説法のたびごとに弥陀の本願を讃歎し。念佛の功能をかめゆきたる後上人きて孫てこれひらへよ善導の御方便機感純熟乃折節也然る比名僧專修念佛の義を信じて所こゝゝく講釋せバ念佛乃弘通何事ここにはもちんやと悦作ゝ法門をもてはやさるゝ法華経の中よい定まりて阿弥陀経ぬ副供養せるなれ共いはれる不ゝを機嫌さまでありしさらんにおよてい。阿弥陀経よりきて四十八願



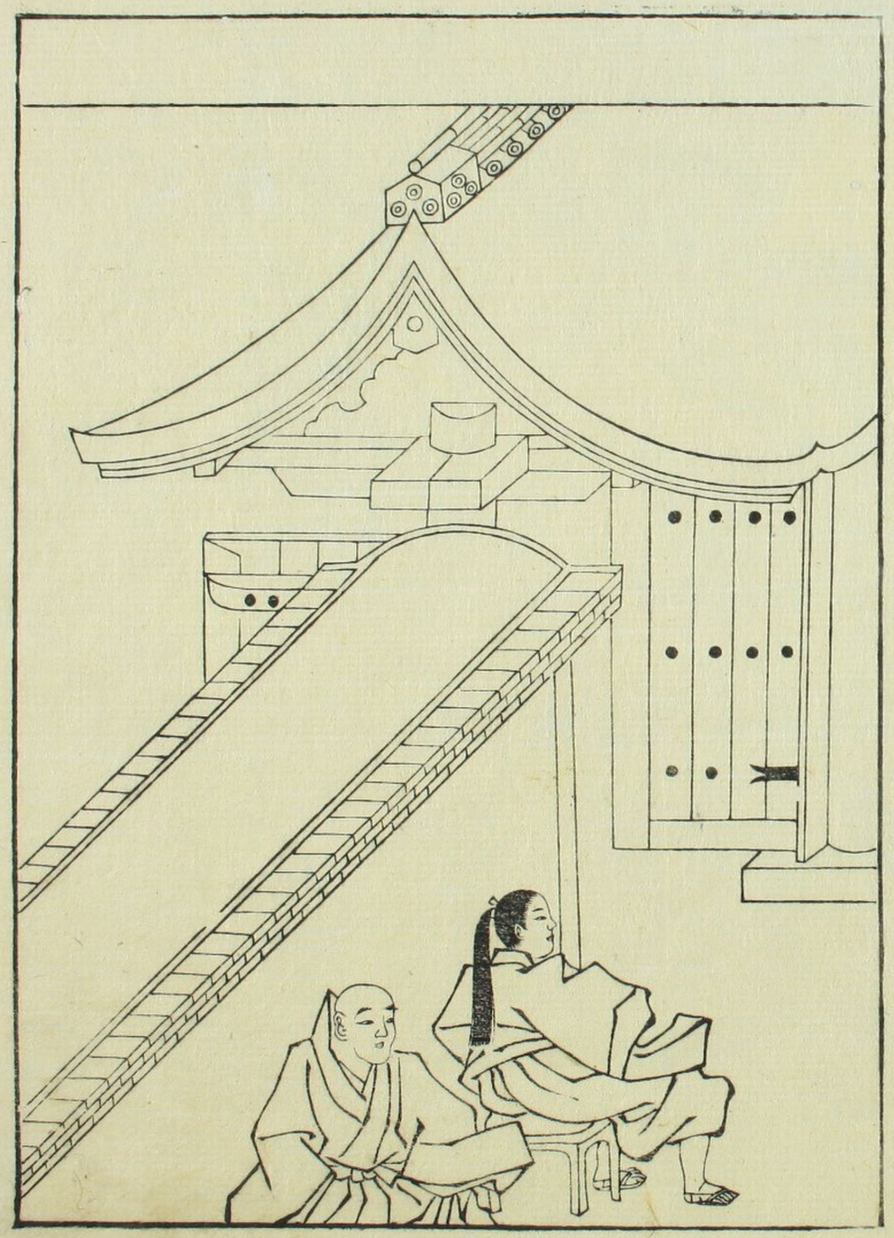
の様を釋しのへつ発遣ゑすらくうを極ら
れまるとなん



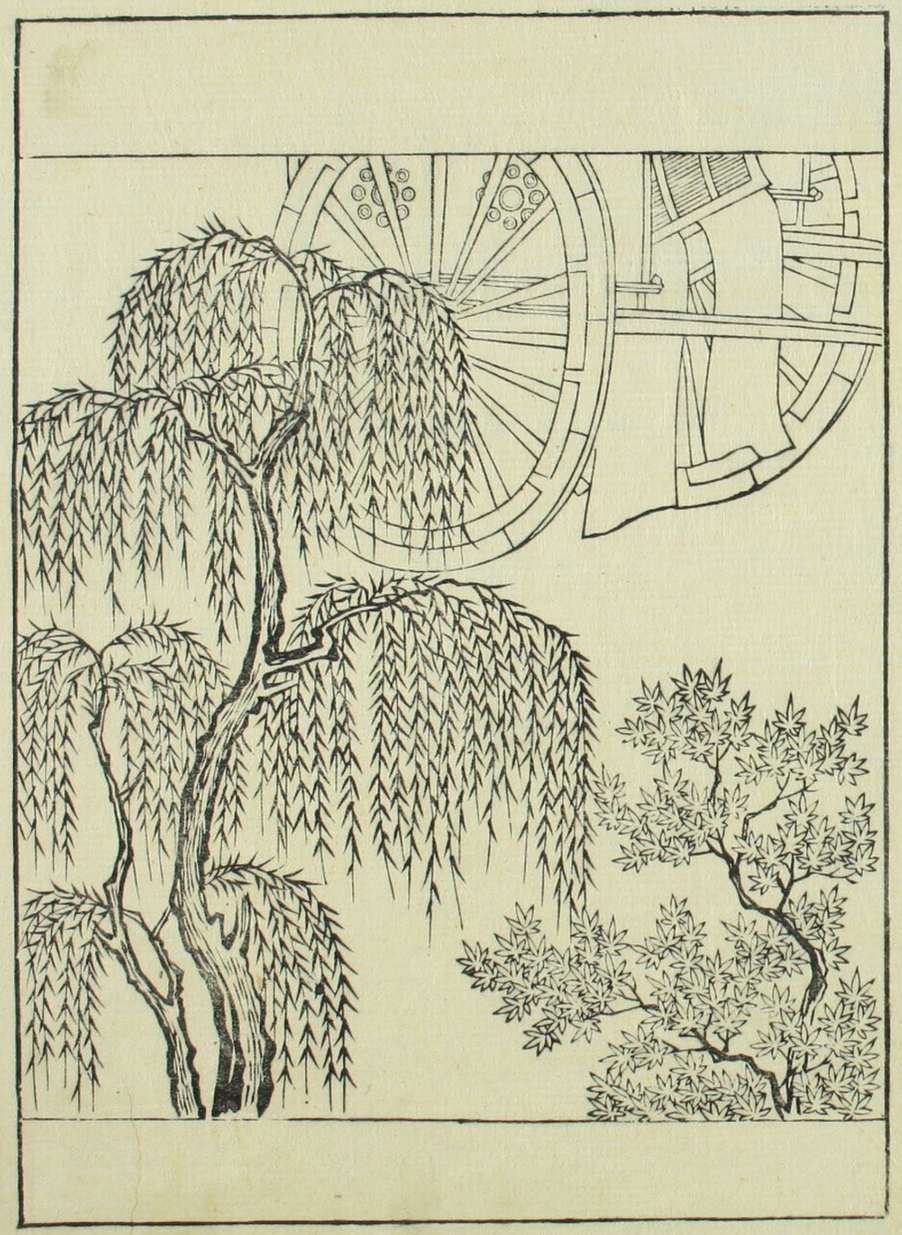
元久二年八月より。上人瘧病をもゝ[illegible]
なわ。月輪殿きこしめして。醫師をめ
ぢき種々の療方をほどこさるゝ。いへども。治術のし
るしなしとて。冥助をあふぎ。御祈請のこ
ゝろざしをぬきんでゝ。詫摩の法眼澄賀よおほせつけ。善導和
尚の真影を圖繪せらるゝ。後京極殿より銘をかく
せ給ふ。安居院の法印聖覚于時僧都より。御導師
を勤をへきよしをいたゝきて。法印申されなるゝ。

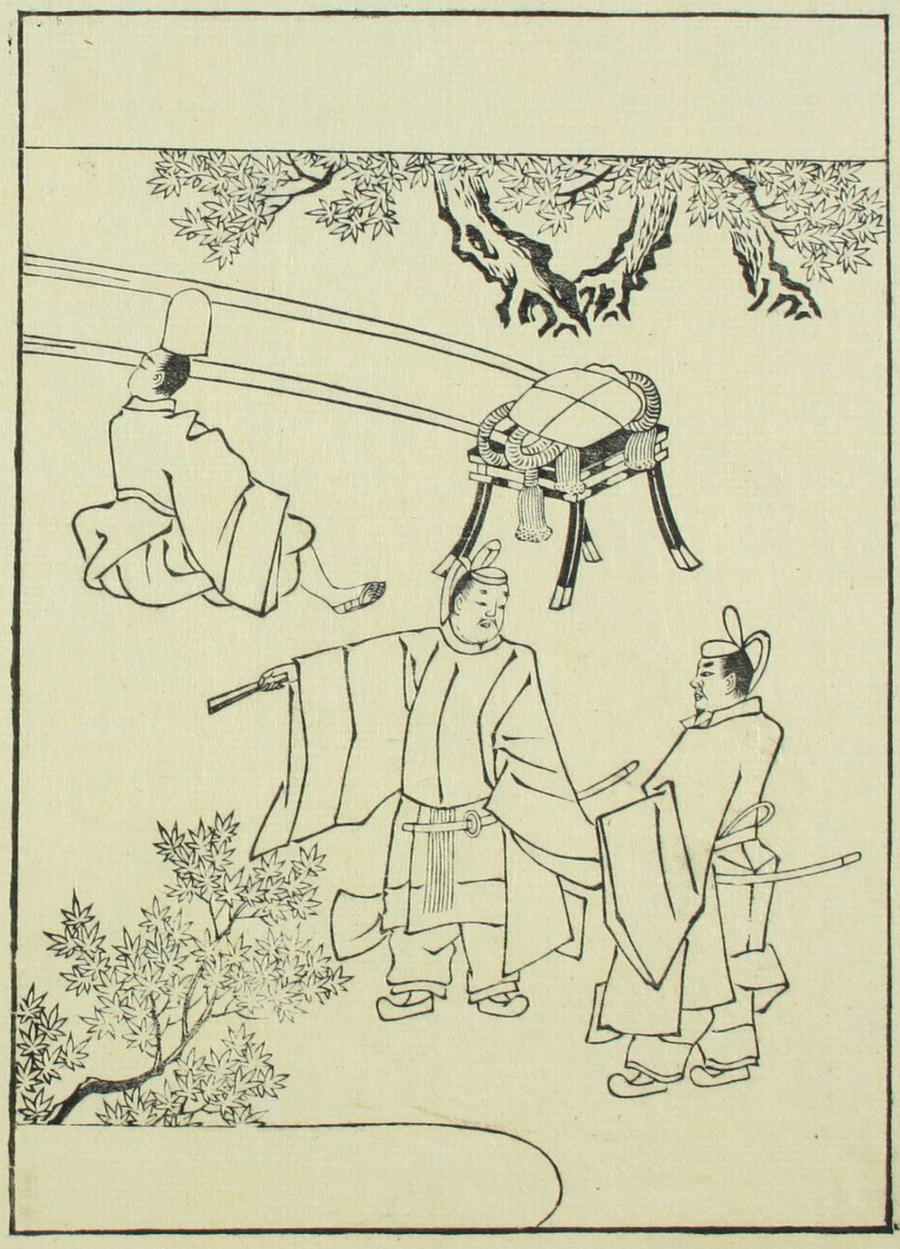
聖覚を瘧病の事侍り。明日はおこる日にて侍へども。
貴命のかたじけなさに師範の恩徳報ぜんと思へよ
系勤をべく侍。たゞし早旦より御佛事終らしめ
給べしとて翌日拂曉より小松殿へ参じ給ひ
時より説法をとゝめて未尅より結願まで説
法の大底は大師釋尊なを衆生に同じ給へ。
たゞ病惱をうけ療治をなしたまふいとん
やたゞ肉身の身いでゝその慈なゝん志まで

ゞゝも浅智愚鈍の衆生はこゝろゝゝ疑ふ
だめて疑心なゝん。上人の化導すでに佛意に
かなふゆへなり。あり往生ぞ疑ひなしとのそれ
うずを志ゝ信ぜ。これ諸佛菩薩諸天龍神いう
でう衆生の不信をなげき給ひ給ふ。四天大王佛
法をまもり給ふ。大師上人の病惱を
いやし給へと祈ん。のへ給ふ。これ善導
の御影乃御前に異香きりに薫し。上人



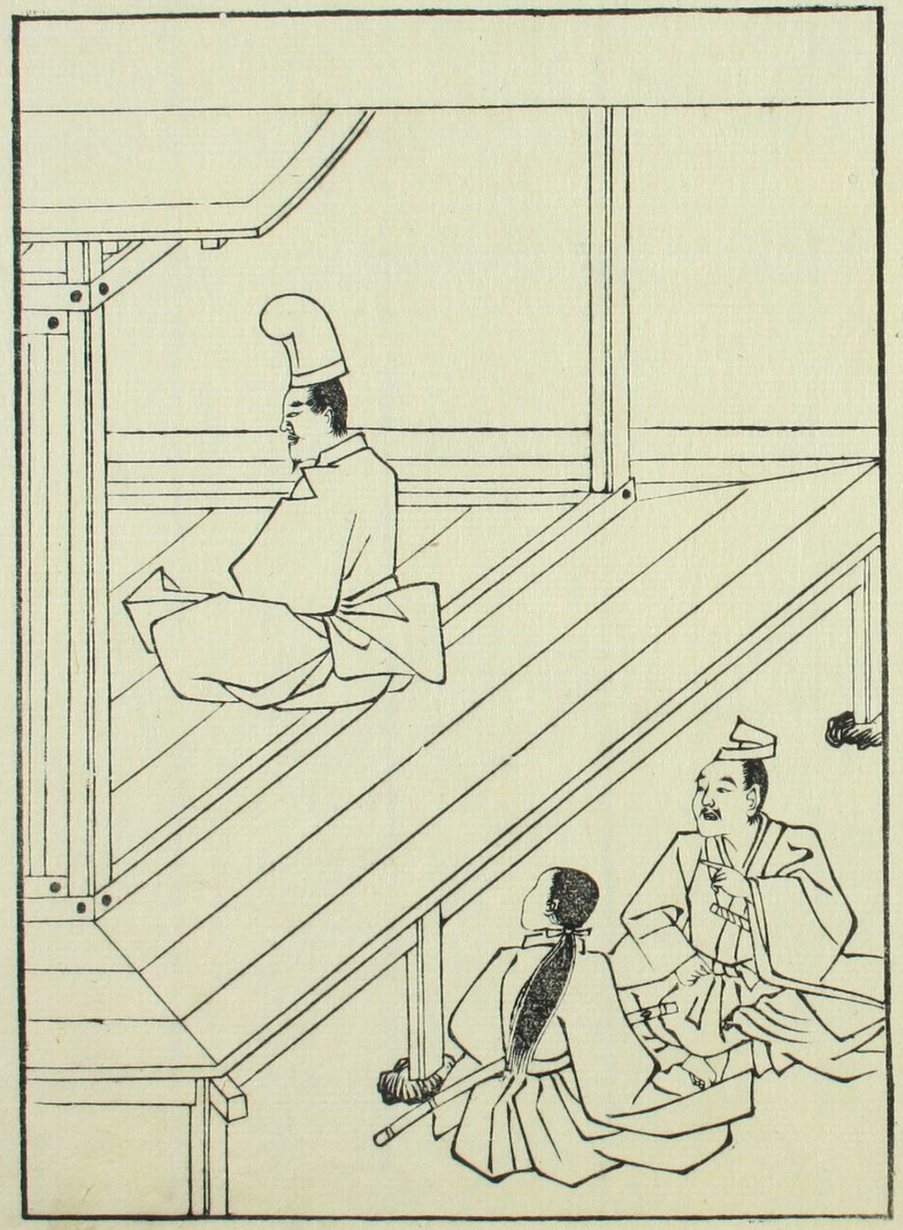
を聖覚をらりに瘧病おこらわ。聖覚自數〳〵
て先師法王の炎旱に御祈禱し。大内うして唱導
をたいら免當座に面白ぬ〳〵て名誉をほどこ
し。聖覚が身のいこに車第一の高名なりとそ
申ける。まことに未代の奇特。そもそもの
口遊にてぞあわしける





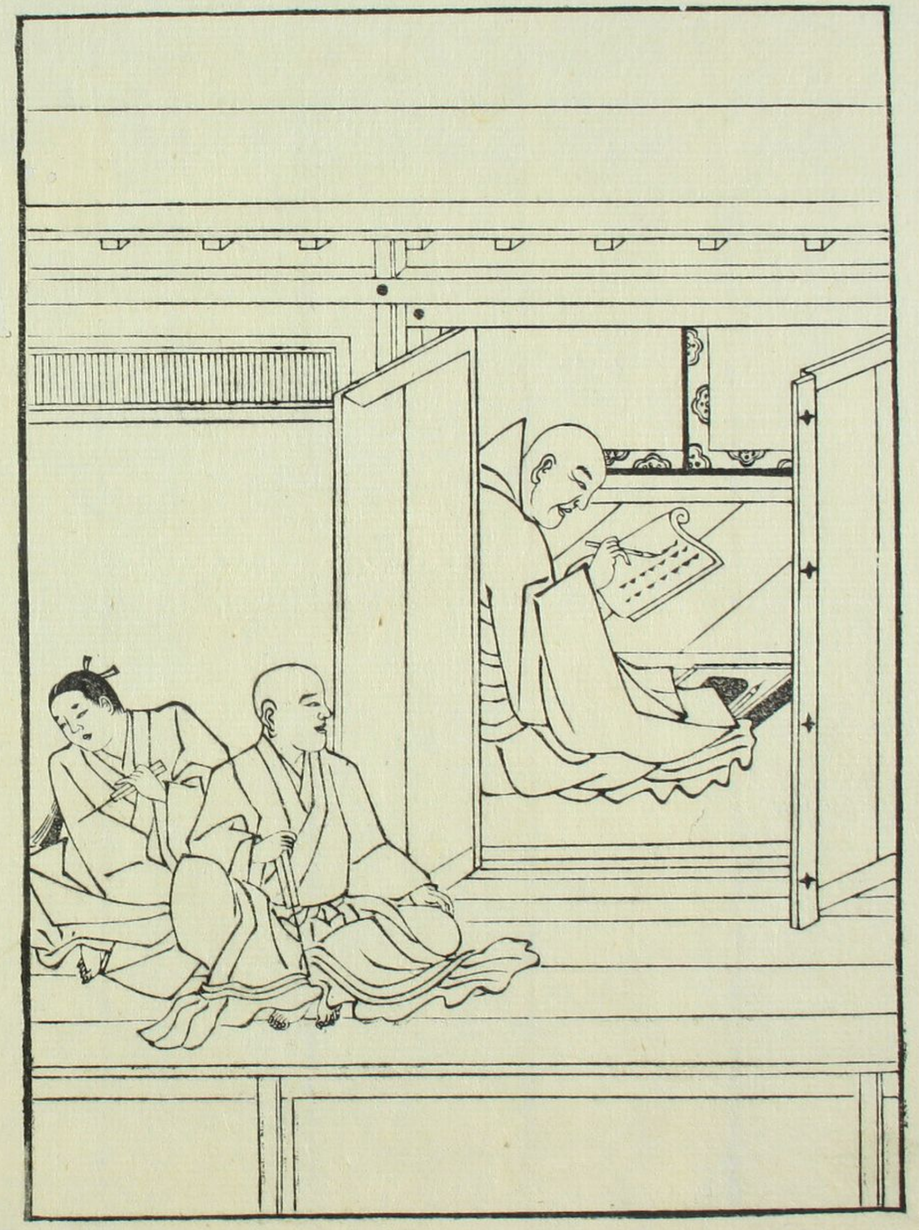
法門ひろめよ上人の勸化を信伏しく念佛往生の
口傳相兼それかゝれたく名譽あわしかゝ兼久
三年ゝ。但馬宮雅成親王念佛往生よ條こゝ不
審をゝく時の名譽ある先達よ御尋あわゝ。
こゝ法門そ專一なりかの請文よ云。御念佛あ
ひこの御用心ハ一切の功德善根の中よ念佛
最上よ侍。十惡五逆なりといへども罪障すくその
障とゝ侍ら後一稱一念ゝ往生せしむ

爲手よ。眞實堅固よ御信受侍へきなり。卿を
猶豫ゝ侍ゆめく侍へかゝ侍。或ハ身の怠惰不淨よ
くくかゝ。或ハ心の散亂妄念よをゝ。往生極樂
小不定のゝ侍ひをすゝ。極くゝ爲ひ事にて侍。
佛意よそむく爲ゝ侍なり。曰くゝ御所作更に
不淨を厭思食へゝ侍。念佛の本意ハたゞ常
念を要ゝ侍。行住座臥時處諸緣を簡ハ侍。
但一日一月なゝ。殊御精進潔齊ゝく

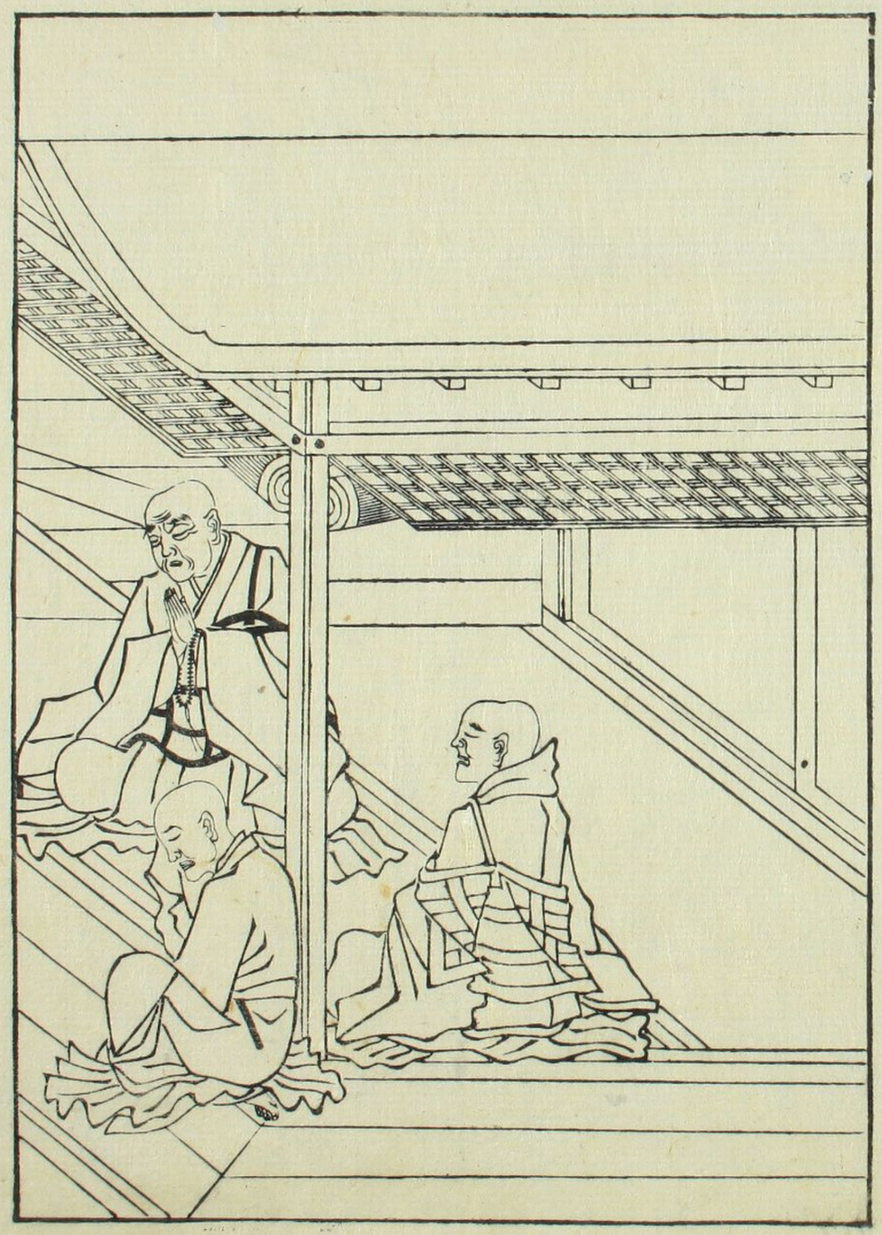


御念佛仕へきなりそれ外日これ御所作ハたゞ御手水
ばかりふく仕へ紀也 已上取詮 又嘉禄二年ころ後鳥羽院
遠所の御所より西林院の僧正兼圓よ。仰下られる
御書よりも散心念佛ハ事一定出離しぬへく侍ん
やう。明禪聖覺なゝくこゝろ尋さゞわて寂上の
至要をたゝ申さるへきよし。仰下さるゝ。
法師こゝ侍りて志深申されなること

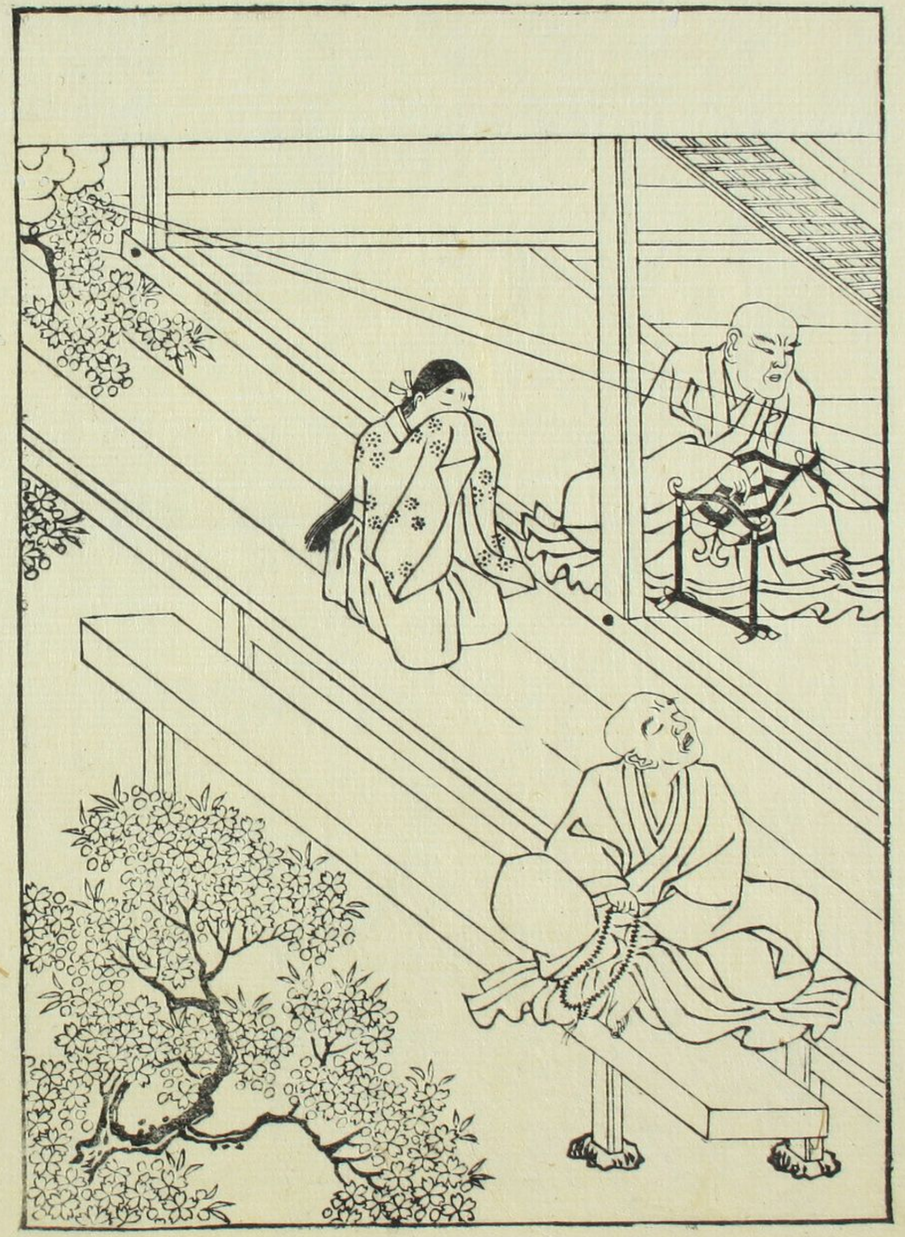
上人の第三年に御忌よあらりて。御追善のあに
建保二年正月よ。法戸真如堂ゑ。七箇日乃
あひだ道俗をあつめ。融通念佛をすめられ
けるに往生に要樞安心起行のやう。上人勸化の
むねこ詞くとのへたまひくこれを我大師
法然上人の伝へ給ひぬる。彼中さば當寺に本尊御
照罰に。弟子へと誓言再三ゑ及てのち。をもて
不審あるん人ハ。鎮西に聖光房よたづ孫とる



為てと申ス托鉢道ハ聽衆の中に一人乃隱道の
僧ありなるべし。草庵よりようへらゆしてそぐに紙後
圓よくぶりく。聖光房より謁し。法流をたづらへ門弟
となり。九列弘通の法將くそなりる。敬蓮社と
いへるこれなり。法乃追福ハ心ざしあ〜ハまく諸人
ハ隨喜をれぶ〜くぞあわ者



かの法ゐ一山に明匠四海の導師とうとく公家乃
勅喚諸亭に招請ひまなきしのぎも西土往生
の心さうぬく稱名念佛の行をこたらなくて。
たゞよ文暦二年三月五日生年六十九にして端
座合掌し念佛數百遍をとなへ往生の素懐を
とげられぬるぬるとぞ伝へ



上野國の國府より明圓といふ僧ありき。遊行
聖ハ念佛申くらゐわるゝ様ハ[illegible]をきゝて。
道場をうまへ念佛を興行し給ふ。或夜の
ゆめに貴僧きたりて告云。念佛申もハいとゝ
ら[illegible]極樂ハ往生をとるなり。敢て疑事なかれ。末代
悪世の衆生出離解脱の道。念佛ハすきたる
なり。我ハ吾朝の大導師聖覺とハ[illegible]なり
法然上人乃教ハ[illegible]ゝ孫陋ハ本願を信じ

念佛を行じて極樂ハ往生したるなりとゝく。一
期の行状往生ハ次第こそかゝれ弱くいま
こハ道場乃念佛ハ結縁ばかりにて。常乃
ちの道場ハあるなり。但十一月ハ本所ハ法談
ハ事ゆゑにより結縁のゝために必本所ハ[illegible]
ゝ。法談以後ハ又こゝ乃ゝかへりて念佛ハ
結縁をへきれもとの居へり。夢さめて後。不思議の
思ひなり。聖覺といへ人いいげき乃所の人ぞ。

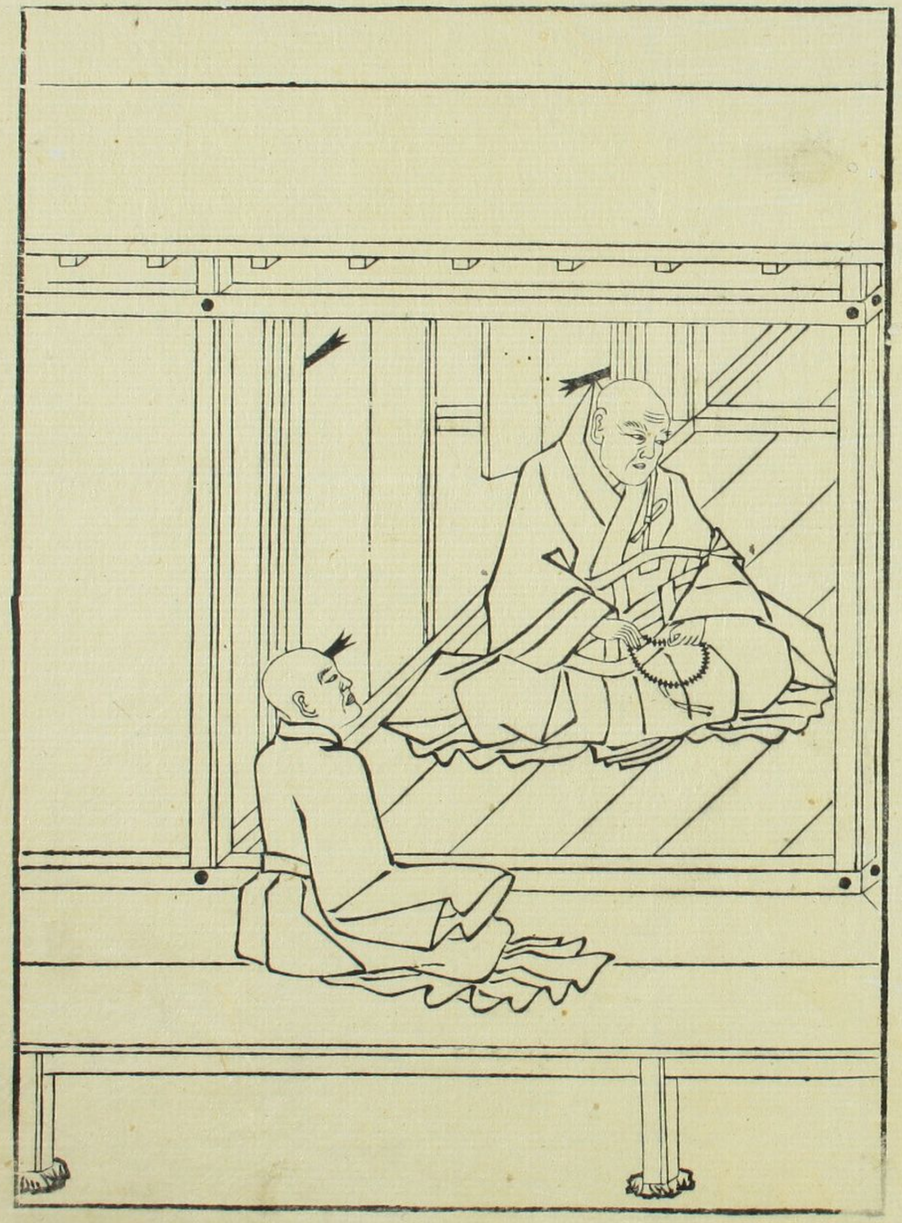
吾朝の大導師とは何事ぞやと申ぬるに生ぬ
たりといふものなり。明圓鎌倉へのぼ
りて日光の別當僧正の房よりて尋申す。
聖覺法印といへるは京都の安居院といふ所よ
りきたる天下の大導師名譽の能説なりしかば
ぬ人いなしと伝聞て上洛して安居
院の舊跡ゆづりぬ。嫡弟憲實法印より夢の次第
をかたるに在世の行儀といひ往生の次第といひ。

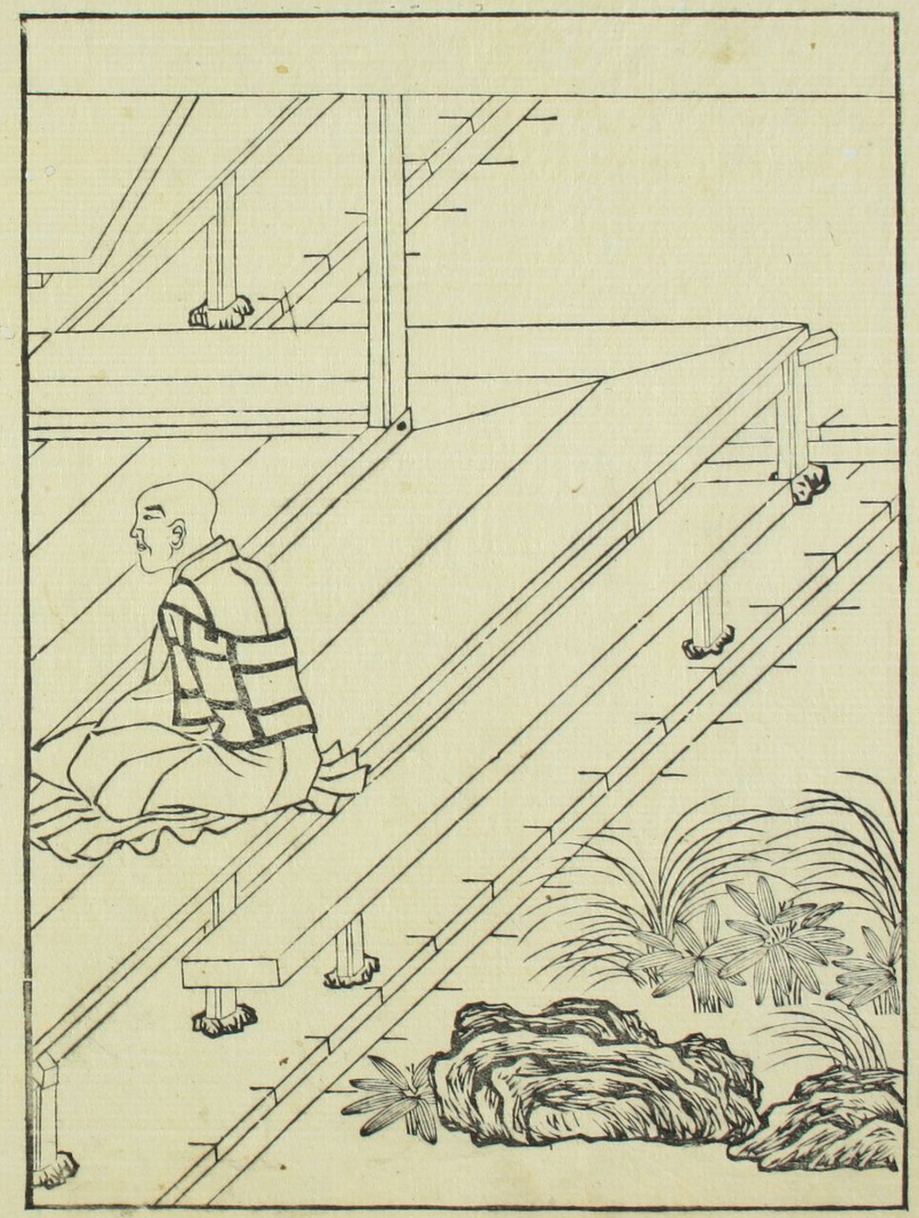
一事ならず違ふる事なし。就中十一月一日より。
天台大師講を始行して四日まで毎日講經
終日の論談なり。十一月より本所法談
あり。結縁のために必本所より歸洛きよ示さる
事。これ講演の砌り影向の條疑なしとて。憲實
法印感涙をながす。明圓は聖覺法印の
墳墓よりてゆめの中の勸化をよろこび。歡
喜の涙をながす。一心専修の行者よりて

是ハ本國より来りて自行化他のたゝめ念佛
の外他事なし毎年其後ハ安居院の墓詣と
おなじく毎年上洛して墳墓をそなへまう
でる一朝のあひだ念佛をこたる事なくして
瑞相をあらわす端坐合掌して数百遍の念佛
をとなへ殊勝の往生をとゝのへたり子息明心幼稚
の時いまだ後家の尼年ごろに安居院の墓詣を
しるゝ明心成人の後毎年ごとに明心上洛したり

明心又兼日より往生の時日をさゝげていまだのぞむ
念佛数百遍をとなへ端坐合掌して往生の素
懐をとゝのへられ其後ハ明心が子息明覚毎年
上洛して墓詣をしまゐらせ念佛衆ハ聖覚
の舊跡を念佛の本所と作崇しまゐらせにより
て弟明覚上洛の時憲實法師の嫡弟憲基法師に
のゝ申ゐらせこの念佛盡未来際退轉なへる
ぢるよし僧衆の中に沙汰をとゝのへられ

申さるゝによりて孫陪本願の念佛ハ濁世末代乃
出離脱乃要法なるいへども盡未来際退轉を
免るゝなり。懇懃に書下されなきゝ。御下知
に肖て申せてひとへに本願をあゝぎ。念佛退
轉あるまじきよし。僧衆等請文をたてまつり。念佛
いよ〳〵ふかくこゝろたのもしく國中に貴賤歸敬の
掌をあはせ結縁にまかせひめり。天竺震旦我朝
三國のあひだに多くの人師念佛の勸化をいる
ゝといへども今末法の中に勸化をきゝたる。この
法に勸化のよりてしく人も侍れ





法然上人行狀畫圖第十八

上人製作の選擇集ハ月輪殿乃仰によりて元ひ
進せ給ふ也蓋念佛往生式惡筒たり其筒
要少こと雖ども侍べし。かの集乃第一隱元道綽禪
師聖道淨土の二門をあてゝ。聖道門をすてゝ
淨土に歸する文問云。一切衆生皆佛性あり遠劫
よりこれをもてれ佛よりあゝ。仏のよりてゝいまに
いたるまでゆ後ゝ生死に輪廻して。史宅

をおぼるやと。答云。二種に勝法をゑらぶ。生死城
をいでゝ涅槃にはやくわたりてゝ火宅をいでゝ。
何りのをゝ二ゝにすゝる。一にはいそぐ聖道門にいそぐ
浄土なり。それ聖道の一種ハいまの時ハ證
かたし。一にハ大聖城にとゝ遥遠なるに
二にハ理ふかくして微なるに。これ故に大
集月藏經云。わが末法の時の中の億ゝ乃衆生。
行をおこし道を修すとも。いまだ一人だにも

うるもの無しと。當今末法是五濁悪世なり。
ひとへに浄土の一門のみありて通入すべきこと
これ敬り大經云。もし衆生ありてたとひ一生
悪をつくるとも。命終の時に臨てそなへて十念相續
して我が名字を稱ぜんに若しこれをば正覚を
とらじ。又一切衆生をすべてこゝろかなはぬ
大乘にはゝ真如實相第一義空にいたるを
心にかけて小乘を論ぜハ見諦修道に

修入し。乃至那含羅漢五下結斷し五上をのぞく
て。道俗をらふ事ものくいまゝ其分あゝぼたゝし
人天の果報あるをこゝろこれ五戒十善をもたに
ゝくこれ報ぜまゝよく然ゝたもちうゝ故ゝものいゝれ
ゝぶまれたりをもて起悪造罪を論ずばゝぶんぞ
暴風波浪よゝゝゝゝんこゝ結ゝて諸佛の大慈
をもくめて浄土へ歸ゝ生ゝたゝし一形悪を
ゝくまゝごゝをたゝぶゝくゝ意結ゝけて。専精ゝたゝに

ゝく念佛をもゝ。一切の諸障自然ゝ消除して。
ゝぶゝ往生をる事結ゝ。何ぞ思量をゝしゝく
をもゝべて去心なきや。私云。浄土宗ゝ学者。まゝをもゝべ
かゝく此旨結ゝる。たゝひさゝ聖道門を
学ぶる人なりとゝゝも。浄土門ゝをきゝてゝゝ心
ゝゝあんもゝゝをもゝべゝゝく聖道をすゝく浄土へ
歸をもゝべ。例ばゝゝ雲鸞法師ハ。四論の講説を
すゝく一向ゝ浄土に歸し。道綽禅師ハ。涅槃乃

廣業成さうをきて。ひたすらに西方に行成
ひろめ〳〵ごと〳〵。上古の賢哲なをもつて〳〵の
ごとく。末代の愚魯もしるこれをまつがさうなんや。
同帝二経云。弥陀如来餘行をもて往
生の本願とせず。唯念佛をもて
往生の本願とする文といひて。無量壽
経に上巻本願の文をひき。私の
詞云。問云。あまねく諸願を約して廉悪をえらひ

もつて。善妙をえらびとる事その理あるべし。
なんのゆへぞ。第十八の願より一切の諸行をえらひ
すてゝ。ひとへに念佛の一行をえらびとりて。
往生の本願とするや。答云。聖意はかりがたし
たやすく解しがたしといへども。いま
こゝろをこゝに二に義をもてこれを解すべし。一に勝劣
の義。二に難易の義也。初に勝劣をいはゝ。念
佛はこれもつぱら餘行に劣なり。ゆへいかんとなれば。

名号ハこれ万徳の帰する所也。まことにすれハ弥陀
一仏のあらゆる四智三身十力四無畏等乃一切の内
證乃功徳。相好光明説法利生等の一切の外用乃
功徳。ことごとくを阿弥陀仏の名号乃中に摂在
せり。かるがゆへに名号の功徳をもてぐそくせり
。餘行ハ生ずるにぞ。なのく一隅をほこるこゝ
ろ。劣也。たとへば世間の屋舎のごとく。その屋
舎の名字の中に。棟梁椽柱等の一切の家具を摂
す。棟梁等の一ゝの名字の中に。一切を摂すること
あるハ。ぞこれをもてまことにわぬ。ぞまことバとをれハ
名号の功徳ハ餘乃一切の功徳よりすぐれり。故に
劣なりとて勝をうるとてりく本願とする欲望に
難易の義といハ。念佛ハ修しやすく。諸行ハ修し
がたし。略抄 ゆへにまことにぬ。念佛ハやすきがゆへに
一切に通じ。諸行ハ難きがゆへに諸機に通ぜず。
然則一切衆生をして平等に往生せしめんが

さまたげて難をすてゝ易をとりて本願とする歟。
若し此造像起塔をもて本願とせは貧窮困乏
此をすゝめいとなむ人往生のぞこをもてんとする
を富貴此をのいすゝめ貧賤のをいとなむ
おほ〳〵智恵高才をもて本願とせは愚鈍
下智此をのい定て往生此望なしたんとなり智
恵乃ものいすゝめ愚癡のをいとなむおほし。
多聞多見をもて本願とせは少聞少見の輩ハ
ひとえに往生此望をたんとする歟多聞の
をいとなむを少聞のをいとなむ人おほし。
を持戒持律をもて本願とせは破戒無戒の人
ひとえに往生此のぞこなんとする者を持戒乃
ものいすゝなく破戒のものい甚多し。自餘の諸
行これに准じて思へしこれを思へ。上乃
諸行等なを本願とせは往生なしをいすゝ
なく往生せる者をものいおほしん。然則弥陀如来

法藏比丘は平等の慈悲よりおこされて。
あまねく一切を攝取せんがためにて。造像起塔等の
諸行をもて往生は本願とにあらず。ただ稱名念佛は
一行をもてすべての本願とするなり。乃至問曰。一切乃
菩薩それ願をたてり。といへどもあるひはすでに
成就せるあり。又いまだ成就せざるもあり。いぶ
かし法藏菩薩の四十八願はすでに成就せりとや
せんまたいまだ成就せずとやせん。答曰。法藏の

誓願は一ことに成就しをはりぬ。いんとなれば極樂界
は中よりすでに三惡趣なし。まさに生ずべきこれ
なしもしは三惡趣の願を成就しをはるなり。
なほ成ぜざるとなればすれば
願成就の文よ。又地獄餓鬼畜生諸難は趣なし
といへるこれなり。又彼國の人天命をはりてのち
三惡趣にかへるなしもしまさに生ずべきこと
すれば不更惡趣の願を成就せざるなり。何故

てゝ生ることなくばとれいち願成
就の文なり。又彼菩薩乃至成佛まで悪趣なり
かゝぼといへる是なり。又極樂は人天ばかりの一人
うゝて三十二相を具せる仏者あることなし。
而るに生るべし是則具三十二相の願を成就せる
なり。何をもてゝ生ることなくばとれ
いち願成就の文なり。彼國よむまることをはなし
ことくを三十二相を具足すといへる是なり。

はたことくんじめ無三悪趣の願よりなをなり得三法
忍の願よりいまだ一ての誓願これをもて成就
しなへり。第十八の念佛往生は願あてひらりて
成就せざるんや。然則念佛の人これをもて往生す。
何をもてゝ生ることなくばとれば念
佛往生は願成就の文なり。ゆゑに衆生あらゆる
其名号をきゝて信心歡喜して乃至一念
至心に廻向して彼國よむまれんと願ぜれい

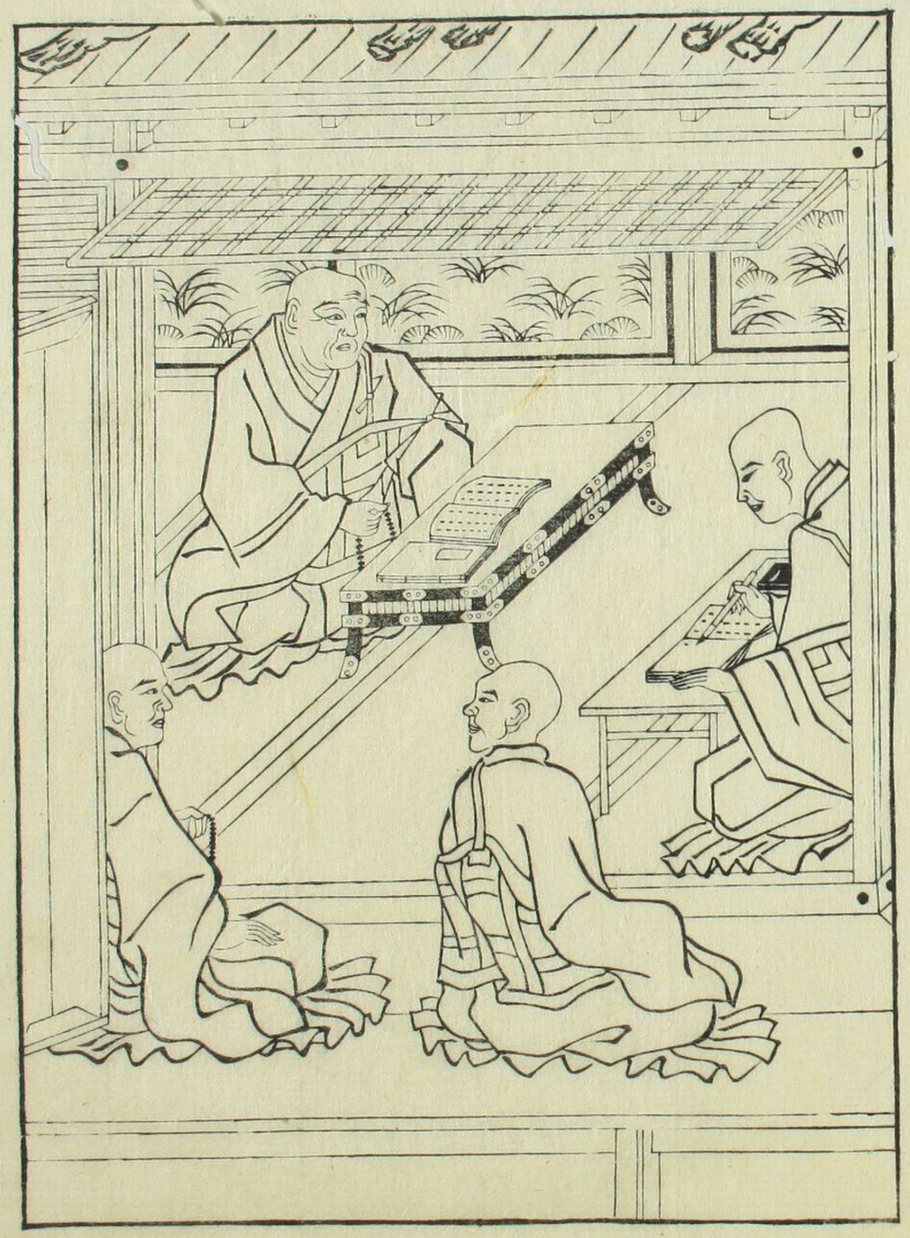
則往生するこゝろを得て不退轉に住をといへる
是也をもて四十八願をたてて淨土を莊嚴せり。
花池寶閣願力にあらはれたるなんぞ
其中にをいてひとり念佛往生願を疑惑す
べきやまたのたなしぶ一これ願のをもむきに
まつたくぶ八正覺をゝしへたまふに阿弥
陀佛成佛してよりこのかた今にをきて十劫
也成佛のちひさでにをいて成就し給へり。ま
ぶたまつるべし一これ願むなしくまうけへらぶ
故に善導の釋に彼佛今現に世にましまして
成佛し給へりまたまつるべし本誓重願む
なしからぶといはゝ一切衆生稱念すれば必
往生をう。已上 ゆゑに速に生死をはなれんとおもふ
二種の勝法の中にまつぐゝを聖道門をはなれて
えらびて淨土門にいれ淨土門にいんとおもふ
正雜二行の中にまつたくもろ〳〵の雜行を

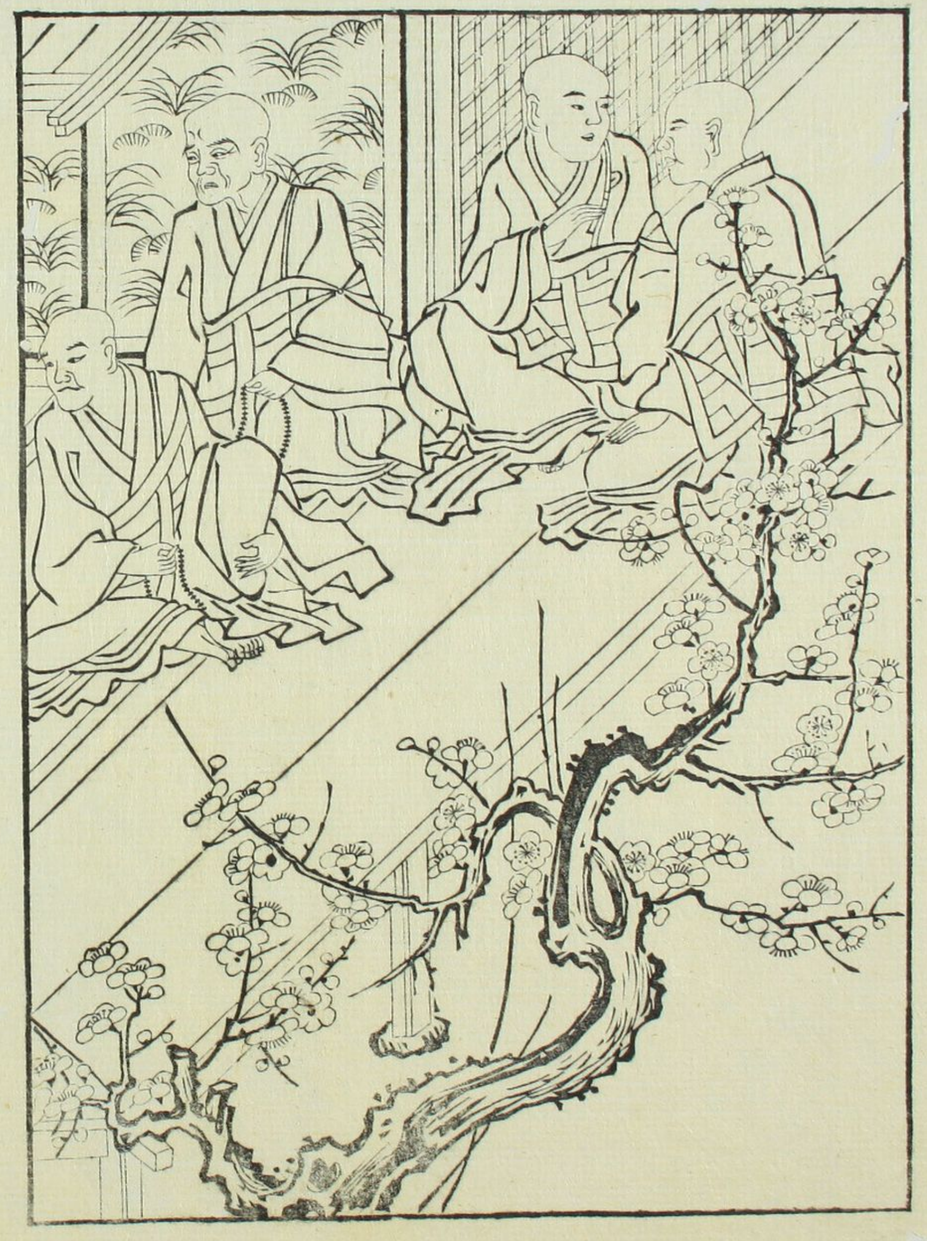
なげきてくぷえひて西行より帰をべし。西行彼
修せんとねをいはば西助二業の中よりなを助業を
傍ようてえらひて西定彼をえらにをべし。西定
の業といぬべすれいちこれ佛の御名を稱ずる也。
名を稱をれどかれ〳〵ばむまるとこ彼う。佛の
本願によるがゆへよこだにねをんこれ善導の
觀經の疏に是西方乃指南行者の目足なり。
志ろれいすふいち西方の行人のれらばをべくく

珍敬すべし。就中毎夜の夢の中に僧あわく
玄義を指授せり。僧といふをそくこれ弥陀の
應現なり。志ろしいぬべしこれ疏い弥陀の傳
説なりとぷいにいをんや大唐より相傳していを
善導ハ志ろ弥陀の化身なりとぷばいぬべし
これ文ハ志ろ弥陀乃直説なりとぷすてにうり
ちんとねをんをのぷりく経法のくをせよと
いへり此ことぐはをれるれあふぎて本地をた

りめをハ四十八願の法王なり。十劫正覚のとなへ
念佛よたのをあわぬして垂迹をとらへハ専修
念佛ハ導師なり。三昧正受ハてゝ往生にうゝ
なり。本迹てゝなをといへとも化導これ一ぬわ。てゝに
貧道し〳〵此典を披閲して粗素意ハさてゝ
たゝ示よ餘行ハ〳〵ゝ捨てゝ専念佛よ帰とそれ
よわこれ〳〵ゝ今自にいるゝ法ます自行化他ハ念佛を
事とそ。然間まゝれよ津をとふをれよ。ゝめすに

西方ハ通津ををてゝたまゝ行をたりめゝ
をれよ。をゝゆゝに念佛の別行ハをてす。これを
信とゝるものいたほく信ぜゝるものすくれ。已上 略抄
念佛を事とゝ往生ハ〳〵ゝ孫うゝ人あに此書ハ
ゆゝかせよすゝ色をんや





同製作の往生大要鈔によ云。至誠心といふ。真實の
心なり。それ真實といふ。身よりのるまひ口よりいひ
心より思ふことごとく人目ばかりをかざる事なく。誠をあ
らはすなり。たとへば人けはしく勇猛強盛の心なり
たとへを至誠心と申。此釋の心よりはたらかなり。
又云。よく三心具足せんと人おもはゞ
かゝんずるなり。往生はうるがゆへにしるなり。又云。
外相の善悪をはゝわるゝ。世間の謗譽をは

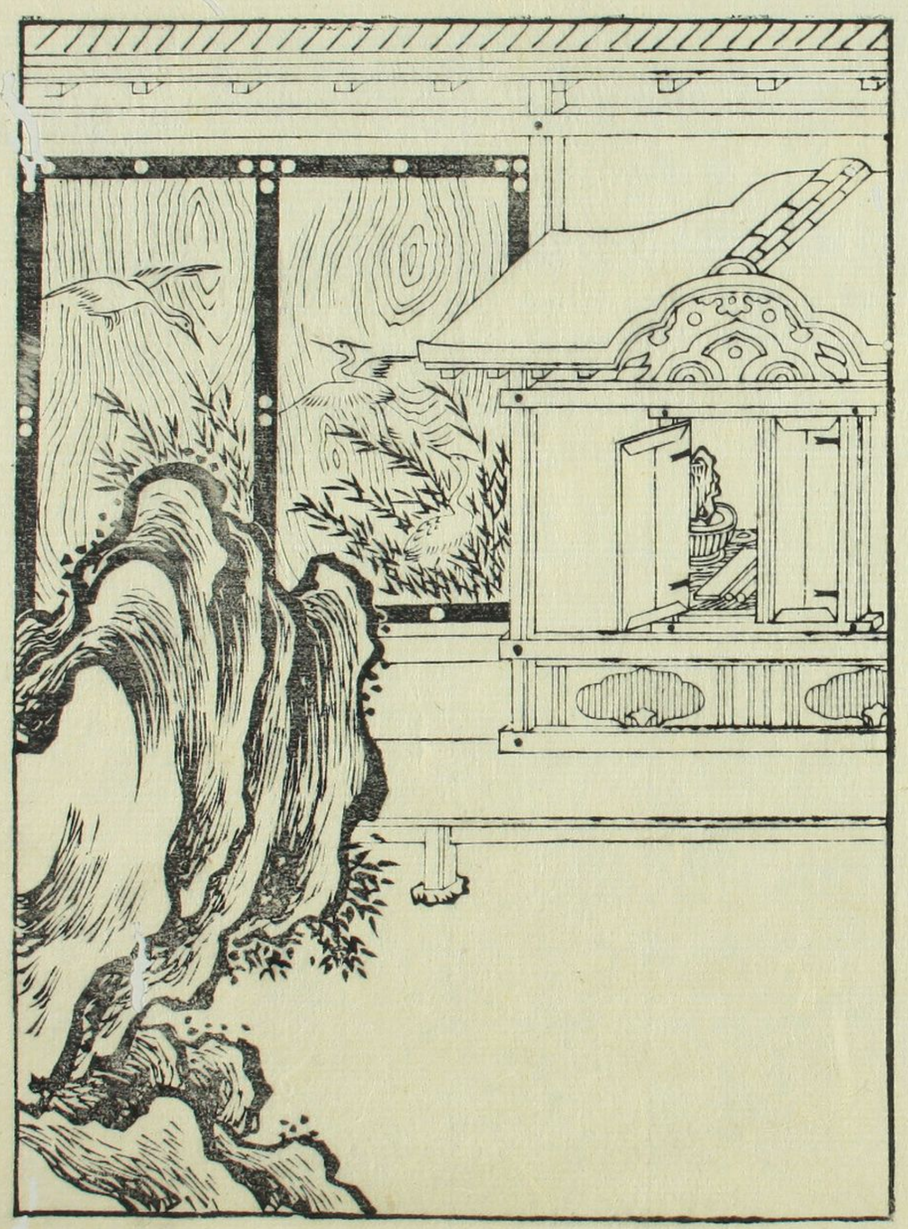
わきまへず。内心より穢土をいとひ浄土をもとめ。
悪をもとゞめ善をを修してまのあたりに佛の意よ
うのゝ人事ばかりを真實といふ也。又云。やうに
申せば。ひとへにこれ世の人目ばかりをあらはなん
どして。人のそしりをもうけんぼう。ばかりをかざり。
ゝく心はまことにおもふまゝふがよしと申すにはあらず。
たゞにまことをふかくおもへば。放逸にして。あるべき事にて
あるなり。時よりそこたる機嫌戒のゝめどころに。

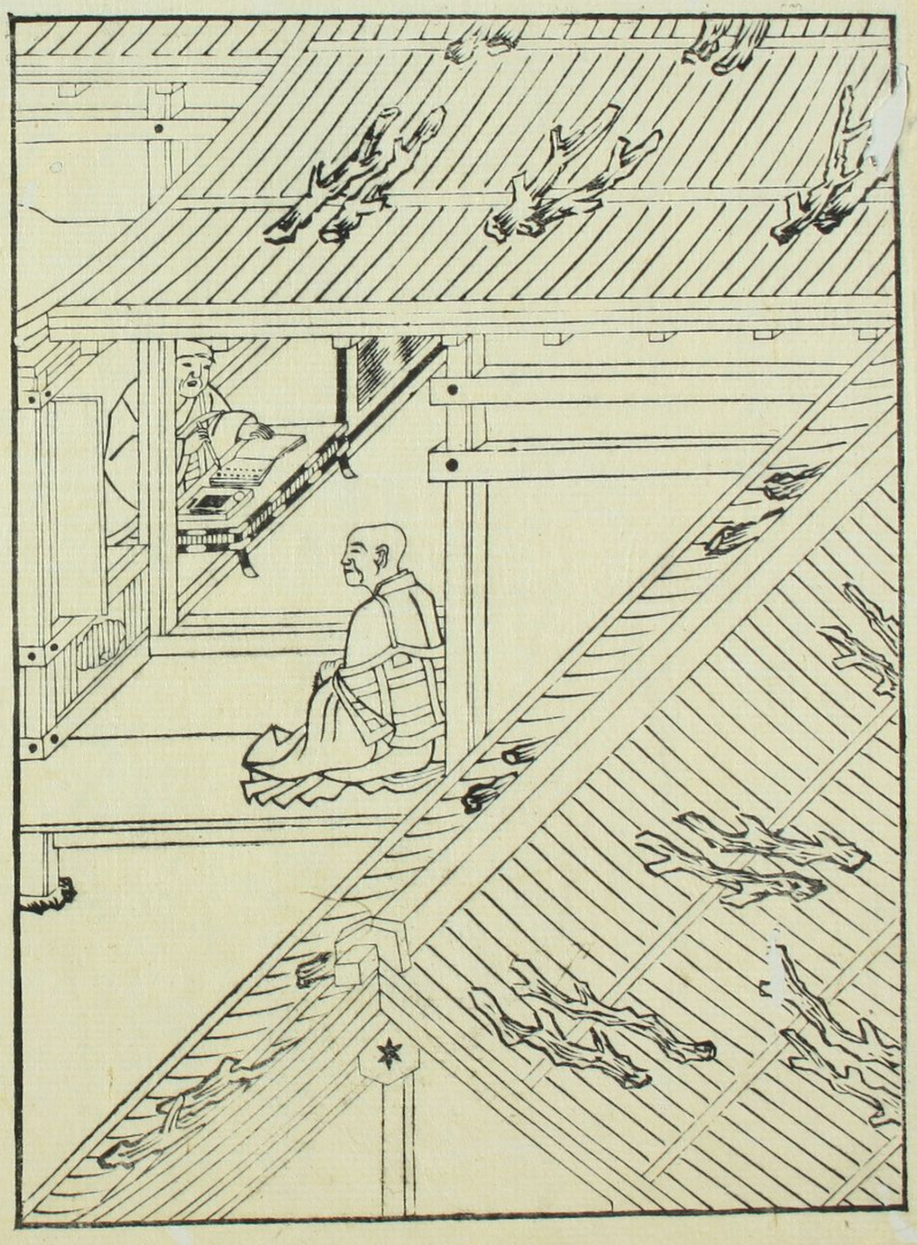
いさゝか人の誠たくむこゝはもぎごゝをはこてある
屋もゝれ又云機嫌戒こなづけゝくぬて虚假り
なる事をあわぬ屋ゝこれをかまへてゝくく
こゝろえわく屋ゝ又云此義を心えわぬ人よこて
あゝん道佛の本願をぐうぐうとこゝを我心乃
ゝるゝれい往生うれゝどと申あひゝるゝがやて本願を
うぐふにて往生ぢやうに申たちなゝゝゝ
佛の本願よかなふ屋ゝゝゝ

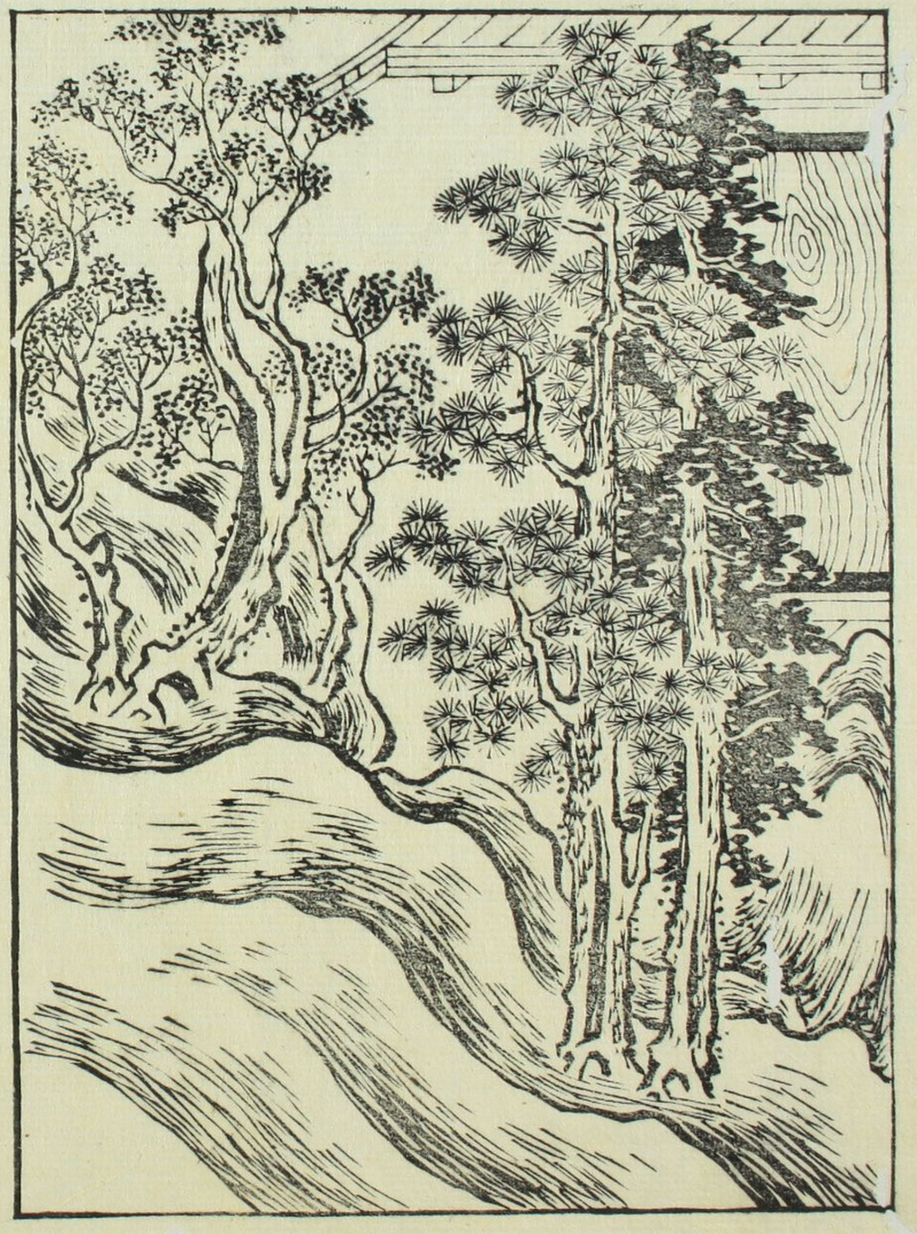
わきまへぢんよりて心のわるさいたきせぬ
事よてこそあんゝれいまい往生ゝてんと
思ふつ世いあるまゝ佛の力をばいう程とは
ゝるこれよすぎて佛の願をうぐふ事いうを
屋きゝ又云たゝ心の善悪をかへりみぢたこの
軽重をもわるまへを心よ往生せんと思ゝくゝちに
南無阿弥陀佛ととれへぢゝあよりきて変定
往生の思をなすべゝその変定心よりてゝれ

いち往生乃業（ごう）ハいちゝまるなり。又云。く心えめれバ
やがて往生なり。往生ハ不定（ふじょう）と思へい。ゆえに不定（ふじょう）と
なり。一定と思へい。ゆえに一定なる事也。又云。
深信（じんしん）といふ。かの佛の本願ハいかれる罪人（つみのひと）をすて
給ふ。たゞ名号ばかりなる一聲（ひとこえ）までよ。決定して
往生給ふ。ゆえにたのもしてずるゆえ
なり。申ばかり。又云。たとへつくるをもすて給ふ。
心ばかりせてたくらんをくるゝかるまじ。一念

も往生をえ給ふ。念佛ハ行にほく申さぬもあわ
なんとあるゝ心うるへのいできくたを。ゆ
ゑ。念佛をバせいとるやうに申しすゞ。返て
あさましゝ。ゆえなり。あく悪をとめ善をとゞ
むる佛法ハいとゞあるへき







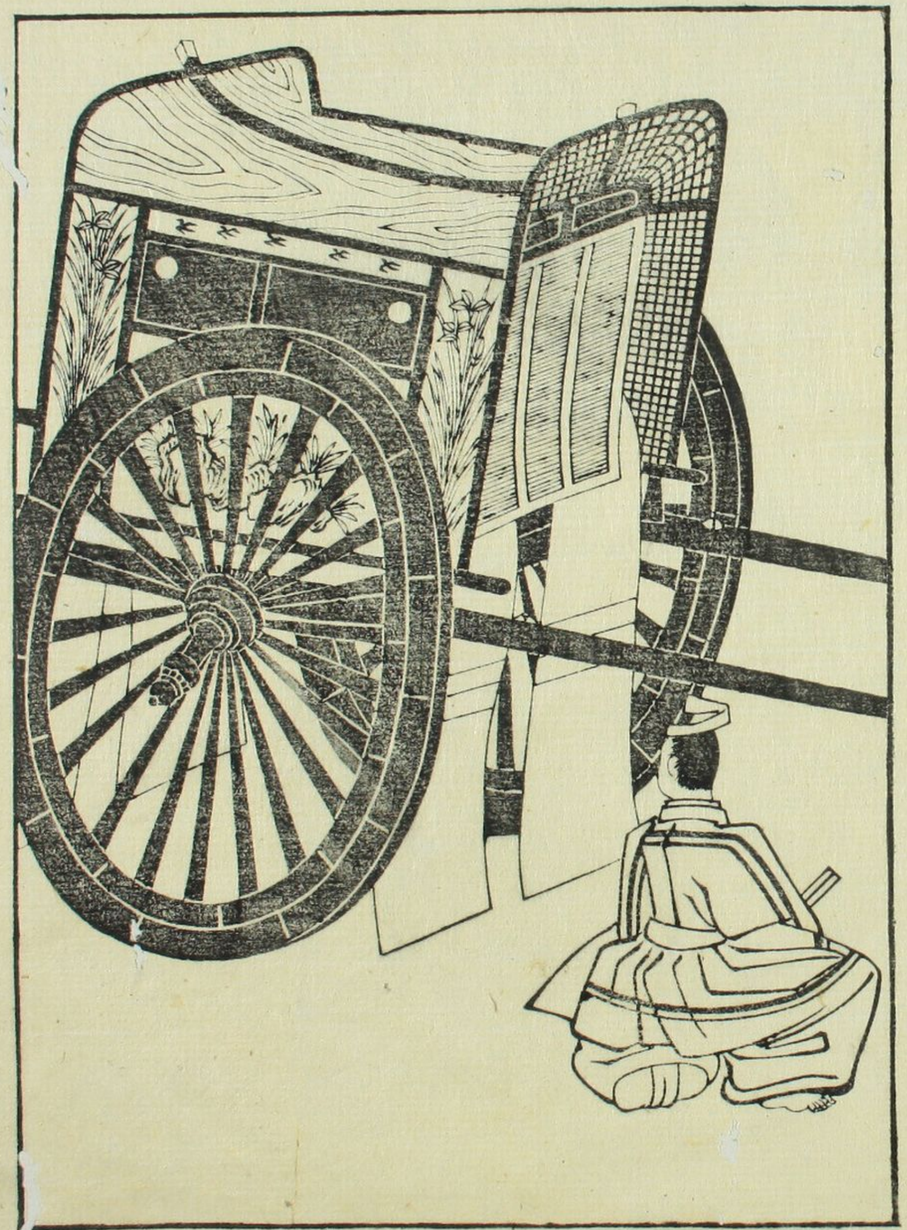
上人大経を釋し給へる紀四十八願の中乃第三十五の女人往生の願の意をのべての給へる上の念佛往生の願ハ男女をきらはず然りいへ乃此願ある其ゆへハ女人ハ五障をもつて別して女人を約せざるもなおいまだ疑心ある生ゆべし其ゆへハ女人の穢ゆをもつて大梵高臺の閣をあらためて梵衆梵輔の雲ゐのそもしてもれく帝釋柔軟の床をも

くるしきく。三十三天は花をうてあそぶ事は。
六天魔王の位。四種輪王乃跡。のそこなくたえく
のげをちく。涙。生死有漏乃果報。無常生滅の
たのしき身らぶ。てをなく。涙。いたいたいんや佛は
をうれをや。諸経論は中にきく。ハ。在く不に
擯出ぶれて。三途八難よあく。涙ハ赴色きうを
かく。六種四生よあく。涙い受色ぶうられ。
ぶれ日本よも霊地霊験の砌よいぶれとくを

きぶれいまたわ。比叡山ハ傳教大師の建立。大師
ミづく結界して。谷をはらし峯ぶうぎりて
女人の形をいまぶ。されく一乗峯たくして五障の
ぶうしびく事なく。一味谷ぬくして三従は
水なく事ぶ。高野山ハ弘法大師結界乃
峯。真言上乗繁昌は地也。三密は月輪あまく
てすくいへどを。女人非器の色をばてはぶ。
五乗の智水ひらくなるこいへも。女人垢穢

のあるをしすかぬ。聖武天皇の御願。十六丈
金銅の舎那。そなはるにこれを拜見をといへども
なを扉の内にいまもこれあり。天智天皇の建立。
五丈石像の弥勒。あふぎてこれを禮拜をなれども
かの壇の上にいの障あり。乃至金峯の雲のうへ。
醍醐の霞のそこ。女人更にうけがたし。悲哉
両足あれどいへども。のぼる法の峯あらぬま
ぼる佛の庭あるを。恥哉両眼あきらかなれどいへ

ども見ざる霊地あり。拜せざる霊像あり。乃
穢土の瓦礫荊棘の山。泥木素像の佛にを障
あるいはいうんや衆寶合成の浄土。萬德究竟の
佛をやこまをよりて往生をねがはんあるを
ばいかるゆへに此理をかぐらく別に此願あり。
善導和尚これ願を釋して云く。弥陀の大
願力によるがゆへなり。女人佛の名号を稱ぜんに。
命終乃ち復女身を轉じ男子となる事を得。

弥陀御手をさげ給ふ。菩薩身をまゝすゑく
寶花のうへに座し。佛よりてゝうけて往生し。
佛は大會にいわゆる無生法忍證悟を。一切の女人。
を。弥陀の名願力ゆゑ。千劫萬劫恒沙
等の劫よりをぢたる女身を轉ずゝ成得べ
き法なり。これ則女人の苦をぬけ女人の樂を
あらはす。慈悲の誓願利生なり。已上見于大經釋取要抄之
ゆる時尋常なる尼女房ごとく。吉水の御房へま

いりて罪ふかき女人を。念佛ゆゑに申せば。極樂へ
まいり給ふなるゆゑに。我やらんと申たれば。
上人大經の釋乃心を祈ゝ申ゆへらまして。
第十八乃願の上にうゝびをたんがをもゝ。
ゆゑ記女人往生の願をたて給へる事ゆゑに
をもゝをかゝげたまふを。ゆゑ成ぬ。
歡喜の涙をながす。これ念佛門のいとに
なるゆゑなり